

チーム医療の根幹 —分かって、分かり合う—

山内 豊明

第62回国立病院総合医学会
(平成20年11月21日 於東京)

IRYO Vol. 63 No. 8 (501-504) 2009

要旨

「分かる」という言葉は「分ける」に通じる。「判断」という言葉も本質は同じであり、判別の「判」と決断の『断』からなり、カオスから整序への作業である。この「分ける」ためには、その方針が不可欠である。方針さえ定まればどのように、いくつに分けるかは自ずと定まってくるものである。逆にいえば、方針が定まらずして「分ける」ことは困難を極め、事実上不可能である。その判断結果を「人に伝えること」までが判断した者のすべきことである。分かっていれ^{かなめ}ばいいということではない。肝心のことは頭の中で整理したことをどうやって人と共有できるかという点である。そのためにはその者だけが分かる言葉ではなくて、誰もが分かる言葉でないと伝えられない。つまり、判断をする者は、皆が分かり得る共通の言葉できちんと伝え出すという、ことまでの責任がある。実践運用能力向上の勘所はまさに「正しく伝えることができる力」である。

医療実践では、その場面を知るのは当事者だけであることが多い。医療機関として委託を受けている場合、たとえ担当制であったとしても、情報は担当者だけのものではなく、スタッフ全員で共有できなくてはならない。そのためには、分かっていることを共有できる方法として言語体系の共有が不可欠である。この共有化は本来ならば医療に関わる専門職全員が地域を超えても共通言語でコミュニケーションできるべきである。医療者相互に共通言語で情報のやり取りができれば、患者にとっても複数の医療機関からなる大きな安全網に護られることになり、ケアの直接担当者にとっても標準化された情報を得ることができることでたとえ医療介入行為自体は一人で行ったとしても広く仲間による支援が得られることを実感するであろう。せっかく分かっていることも正しく共有できなければ意味をなさず、かえって大きな誤りを引きおこしかねない。だからこそルールが大切なのである。

キーワード 相互理解、互尊、共通言語、標準化

「分かる」ということ

「分かる」という言葉は「分ける」に通じるものである。「判断」という言葉も本質は同じであり、

判別の「判」と決断の『断』からなり、カオスから整序への作業である。この「分ける」ためには、その方針が不可欠である。方針さえ定まればどのように、いくつに分けるかは自ずと定まってくるもので

名古屋大学大学院医学系研究科

別刷請求先：山内豊明 名古屋大学大学院医学系研究科 〒461-8673 名古屋市東区大幸南1-1-20

(平成21年6月15日受付, 平成21年8月19日受理)

Fundamentals for Collaboration among Medical Professionals: Understanding Others and Being Understood by Others.
Toyoaki Yamauchi, Graduate School of Medicine, Nagoya University

Key Words: collaboration, universal language, standards, standardization